子供たちの「やってみたい！」を地域で叶える

～未来へつなぐ かわもとの人づくり～

地域の特色ある活動

島根県川本町教育委員会

1　はじめに

川本町は、中国山地の北斜面、島根県のほぼ中央部に位置します。平成の大合併の時に単独町政を選択したことから、島しょ部を除いて県内で最も面積が小さく、約81％が山林で占められているとともに、中央部には中国地方最大の「江の川」が貫流しています。

本町は、江の川の水運により、古くは石見銀山の玄関口として栄え、宿場町として発展しました。江戸中期から明治にかけて繁栄した「たたら製鉄」の生産地として、早くから町が形成され、周辺地域の中心地だった川本町（当時は川本村）は、明治5年に郡役所が置かれました。その後、国・県の出先機関が集積されたことによって、邑智郡の行政・経済の中心的な役割を担う「ひと」や「もの」が盛んに交流するまちとして発展してきました。しかし、これらの行政機関や事業所の整理統合による町からの撤退が相次いだことも影響して過疎化が進み、現在の人口は約3,100人、高齢化率は45%となっています。刻々と変化する社会情勢に対応し、本町では第6次総合計画に掲げる「たすけあい・支えあう中で、自分らしく暮らし続けられるまち」の実現に向けたまちづくりを進めています。

2　学びの環境の充実を目指して

本町には、町立小学校と中学校が1校ずつ設置されています。1学年20人程度の小規模な学級集団が9年間続く環境は、人間関係の固定化や競争力不足などのデメリットもあると言われていることから、町内の3小学校が統合した平成24年度から「学び合い学習」に取り組んできました。「学び合い学習」は、誰もが安心して学ぶことができる関係づくりを基盤として、自らの考えや集団の考えを対話の中で発展させながら、より深く相互に学び合い、学力の定着を目指す取組です。10年が経過した今、今後は「よりよい学級集団づくり」から「学習集団づくり」に発展させていくことが重要と捉えています。

学力向上の取組のひとつとして、個々の学習意欲向上を目指す「自らの学び応援事業」を実施しています。未就学児から高校生（町内在住者）までを対象に各種検定料を全額補助する制度で、平成29年度に英語検定を対象として開始しました。令和4年度からは算数・数学検定と漢字検定も対象としています。補助対象ではないものの、大人の受検も可としたところ、幅広い年齢層の方や親子で検定に臨む姿も見られました。

また、本町に設置されている県立島根中央高校は、県外生（地域みらい留学生／しまね留学生）の受け入れを積極的に行っており、全国約100校から生徒が入学しています。小さい町ながら、小・中・高が1校ずつという特色ある環境を活かして、育てたい子供の姿を学校、地域、家庭で共有し、町全体が子供の学びに関わってい

「あそラボ」の拠点として小・中・高校生が集うコミュニティカフェ

く仕組みづくりに取り組んでいます。

3　「やってみたい！」を地域で叶える「かわもと あそラボ」

町の中心地にあるオレンジ色の建物には、放課後になると高校生や中学生が集まってきます。「かわもと あそラボ」（以下「あそラボ」）では、子供たちの描く「やってみたい！」を地域で叶えていくための支援や居場所づくりをしています。普段は思い思いに過ごしていますが、イベントに向けた企画会議や開催準備など、子供たちの自主的な活動の拠点であり、ボランティアやインターンとして、出身者や卒業生などの大学生が「あそラボ」の活動を支えてくれています。

廃線の駅舎を活用したイベントで活躍する子供たちは町の活性化にも取り組んでいます

「あそラボ」の取組は、令和２年度から展開された島根県の「ふるさとづくり推進事業」の一環として始まりました。町全体で子供の学びに関わり、地域で子供を育てる意識を醸成していきたいという町の思いと、中高生の企画力・計画力・運営力・対話力などを育て、成長を支援したいと願う地域住民と、地域との連携による教育活動の推進に取り組む島根中央高校とを、当時の派遣社会教育主事がかけ橋となってつなぎ、県の事業をきっかけに形になったのが「あそラボ」です。教育委員会の委託事業として実施しており、その目的は（1）子供たちの世代を超えたつながりをつくること、（2）高校を卒業して地域を離れてもつながり続けることができる仕組みをつくること、（3）地域住民が継続して子供たちを支える体制モデルを構築し人の還流につなげること、の３点です。

この事業を通して、子供たちの活動を支える体制が徐々に整い、大人にも意識の変化がみられてきました。そして、活動に取り組む中高生と大学生のつながりが芽生え、大学生が子供たちを自然にサポートする様子が見られるようになりました。このような成果は、本町の今後を考えた時、非常に大きなものであると感じています。地域の中で、子供同士や、子供と大人がつながって活動することにより、活動の楽しさや人とつながる喜びなどが感じられると、活動に取り組んだ子供たちは、卒業を機に地域を離れても関わり続けたいという思いをもってくれるのではないでしょうか。そして、そういった子供たちが数年後、地域でさらに活躍してくれるのではないかと期待しています。実際に、島根中央高校の卒業生が「あそラボ」の長期インターンとして町に戻ってきてくれました。県外出身の彼は、高校在学中に経験した“人とのつながり”が本町でのインターンを決意した決め手だったと語ります。「あそラボ」では今年度も大学生インターンを受け入れており、ここでの活動を基盤とした人の還流や関係人口拡大にもつなげていきたいと考えています。

4　おわりに

立ち上がりから４年目の現在、「あそラボ」の取組は徐々に認知度を高め、注目していただく機会が増えてきました。持続可能な取組であるためには課題も多いですが、これからも、子供たちが地域の宝を掘り起こしたり、再認識したりするなかで力を身につけ、自らの学びにつなげていけるような活動を支援していきたいと考えています。そして、未来につなぐ人づくりのために、幅広い世代を巻き込み、地域でのタテのつながりとヨコのネットワークによって、誰もが学び続けることができる町を目指していきたいと思います。

教育長
宇山　廣繁